

view

視野

探求心

加用文男

(大学教授)

はつめい

われわれ保育や幼児教育の関係者は「アート」とか「探求心」とかの言葉にやたらに弱い傾向があるということを率直に認めるべきかと思えます。大人の世界では、「アート」は芸術につながりそうですし、「探求心」は科学につながりそうに思えてくるからでしょう。もちろんそうなのでしようが、「芸術」という言葉は、美に中心化されて、基盤にある身体性を忘れさせる危険性を持っていきますし、「科学」は、理知的な面に特化されて、感情性を、ひいては行為性を軽視させがちになるように思えます。必ずそうなるという意味では決してありませんが、そのような危険性をはらんでいるという意味です。「弱い」ということはそういうことです。

「アート」は、素材となる何かにかかわることです。絵の具、パステルクレヨン、泥、砂、粘土、土、水、木、葉っぱ、虫、抜け殻、その他……これらに触れてかかわれば、身体が対象に浸されて「汚れ」ます。つまり「身体が汚れることをいとわない感性」、これが基盤になっているはずで、子どもたちがどんな立派なものを作ったか（描いたか、演じたか）だけでなく、

加用文男（かようぶんお）
京都教育大学教授（発達心理学）。最近の著書：『遊びの保育の必須アイテム』（ひとなる書房）、「子どもの「お馬鹿行動」研究序説」（かもがわ出版）。1951年生。

子どもたちがこの「汚れ」に対してどのくらい深い耐性を持ち得たかも重要な構成成分となるように思えます。

子どもという存在を「探求心」に結び付けて考えた場合に忘れてはならないのは、行為性（あるいは「動き」）かと思えます。

子どもの探求心と行為性

学童保育所という場でのことですが、指導員のYさんの報告です。

十数年前の学童保育でのこと。季節は冬。使っていないエアコンから、なんと水が噴き出してきたのである。このあり得ない事態に、一体何が起こったのか、大慌ての私だった。エアコンにつながっている管をたどり、室外機を見に行く。

なんと、足洗い場の水道の蛇口に、エアコンの排水ホースがきっちりつながり、水が逆流していたのだ。なんてことをしてくれた！ 水浸しになったあたりを片付けながら、エアコンの故障にならないかと心配する指導員をよそに、当の子どもは、ああ、こうなるんだと納得の表情だったのを覚えている。

別の指導員のSさんも、「子どもというのは、やってはいけないことだとわかっていながらも、これやったらどうなるねんやろ？ などと、くだらないことを思い、変に好奇心を持った結果、自分がケガをしたり、良くない方向になったりしてしまう、おバカな生き物なのだ」と指摘しています。同じく指導員のMさんの息子さんは、小学校一年生の時、カエルを冬眠させ

ようとして冷蔵庫に入れたという。

思い付いたことはやってみたくなるといふ子どもの傾向を示す調査・研究は幾つかありますが、わかりやすいものとして、超能力の信じやすさについての研究を挙げることができます。一九七〇年代から八〇年代にかけて、自称超能力者ユリ・ゲラーをテレビ番組が盛んに取り上げて、一つのブームをつくり上げました。子どもたちばかりではなく高校生や大学生、果ては一部の大人たちまで巻き込んで非科学性志向が強められた時代でした。その傾向は九〇年代以降も弱まってはいませんが、こういう傾向に関連させてベネッセコーポレーションが一九九四年に、小学校四、五、六年生約一六〇〇人を対象に「おばけとジンクス」という調査を行っています。大規模な調査ですし、調査項目も多岐にわたっています。例えば「スプーン曲げ」などについて面白い結果を示しているのです。実際に「念力で曲げようとしたことがありませんか？」という問いに対して、約六割の子どもたちが「やったことがある」と答えているのです。大人でも、自分でもやってみたという人は少なからずいるでしょうが、小学生は六割の子たちがやってみたといいのです。こういう結果を見て、やはり子どものほうが信じやすいのだ、マスコミの影響を受けやすいのだと受け取ることもできますが、やってみたくなくて実際にやってみたという回答に子ども性を見ることもできるのではないのでしょうか。マスコミ由来の情報をなんとなく受け入れてしまうことの多い大人性との対比で考えてみますと、子どもたちの能動的な「ふとノリ」行動傾向に未来を感じたくもなりません。

次は、河崎道夫著『ごっこ遊び』（ひとなる書房 二〇一五年）で紹介されている、ある女

子学生の『魔女の宅急便』をめぐる述懐です。ごっこというより、探求的な「ふとノリ」行動のようです。

「私も昔はキキのまねをしてホウキにまたがっていたなと思い出した。小学校か中学校になつて友だちに聞いてみると女の子はみんな、一度はやったことがあるといっていた。私の感覚だけかもしれないが、キキのまねは、セーラームーンのみねと少し違った心境であつたように思う。セーラームーンに対しては憧れがありつつも、それが非現実的であることを理解していたが、キキには本当になれそうな気がして、ホウキをまたがずにはいられなかつたのである」

思い付いたらやつてみたくなつて実際にやつたという行為性こそが、子どもの世界の探求心の本質と理解すべきなのかもしれません。

最後に一つ紹介。日本児童教育振興財団主催「第51回わたしの保育記録」（二〇一五年）で大賞に輝いた山梨大学教育学部附属幼稚園の北上夏希さんの記録は、ある子が登園中に見つけたカエルを（逃げ出さないように、と思つたのか）頭と手だけ出して砂場に埋めておいたらなくなつた……ことから始まりました。その後、みんなを巻き込んで大騒動となり……（詳細は原文に）……子どもたちの行動力と、それがクラス中に伝染していく姿に、若い担任がたじたじとなりながらも付き合つていって、「カエルのお尻から赤いものが出てる！」という大事件ではついに養護の先生まで巻き込んで、カエルのお尻に綿棒を差し込んでチヨウチヨならぬ腸解消事件へ……。子どもたちの発言の羅列だけではとても描けない行為性記録となつており、読者を脱帽させます。